

(2) よさを伸長させようとする態度の育成

「1分間スピーチ」や「学級通信」などを通して、T子のよさを友達が認め、T子も友達のよさを積極的に認めることによって、「友人関係が全くつまらない。」から、「友から学ぶことは、大変多い。」「友達とはいいいものだ。」という考え方に変わっていった。

また、休み時間など一人で過ごすことが多いT子が、「学級の机の整理」「班新聞の発行」「学級に花を持参」するなど、学級の一員としての自覚を持つようになった。

これらのことは、生徒が互いによさを認め合い、自分のよさに自信を持ち、よさの伸長にもつながったものと考えられる。

(3) 諸検査や調査を生かしたよさの発見と伸長

「よさのレーダーグラフ」では、教師の評価が、生徒の自己評価や相互評価より低い場合、教師側の見方を変えることによって、生徒の変容が期待できる。

教師はT子の「指導性や明るさ、活発さは低い」と評価していた。しかし、T子は教師や友達の支援を受けながらも、生活班の班長の役目を果たしたり、自主的に班新聞を発行したり、校内陸上競技大会で長距離走に出場するなどして、自分のよさに自信を付け、よさを伸長、発揮させることができた。

個のよさを把握し、伸長するためには、諸検査や調査の結果を指導、援助に生かすことが大切である。この場合、客観的な評価をもとに、生徒に対する教師の見方を変え、支援の方針を立てる必要がある。

(4) 情意面の評価を生かす賞賛と支援

T子の場合、5月の目標は「中間テストを頑張る」といった程度の目標であった。そこで「教師からのアドバイス」の欄を利用したり、言葉かけをしたりして、一人一人にあった支援を行い、達成可能な目標を設定させた。その結果、9月には、「学習課題を忘れないようにする」「授業中は少なくとも2回は手を挙げ、発表する」「起床時間を守り、遅刻をしない」という、具体的な目標を

立てられるようになった。

生徒一人一人の目標に対して、具体的な支援を行うことは、個の存在を大切にする方法の一つとして大切なことである。また、集団の目標と個人の目標の調和を図るためにも必要なことである。

また、目標達成までの過程を重視し、賞賛や励ましを繰り返すことは、情意面の評価を重視することのみならず、自分のよさに気付かせ、伸長することにもつながった。

(5) 支援の方針について

「性格的にマイナス要因が多く、孤立化傾向にあり、学校を休みがちなT子」に対する支援が、友達とのかかわりを深め、班活動や係活動に対して積極的に取り組み、行動や発表に自信が持てるようになった。

事後調査でのアンケート「自分のよさを挙げる」では、「やさしさ」「責任感がでてきた」「友達と協力できる」「やや積極的になった」「明るく振る舞える」「学級のために働こうとする」「礼儀正しい」を挙げている。

これは、本事例による支援が、T子のよさをとらえ、生かし、伸長することができた結果であると考えられる。

中学校の場合、学級経営の基盤に「生徒のよさをとらえ、生かす」ことが大切であるが、学級担任だけではなく各教科担任など、学級にかかわる全教師の支援が必要であり、学年・学校経営の中で「支援の在り方」を研究し、実践する必要があることをも本事例は示唆している。

3 個を生かす学年・級経営アイデア集1日編

「アイデア集1日編」は、日常の学級経営の中で、具体的にどうすることが「個を生かす」ことにつながるのか、という見地から昨年度収集・開発したアイデア集を学校生活の1日の活動に合わせ、主な事例を使いやすいようにコンパクトにした。

内容的には、支援の一例であることを踏まえ、実態に応じて活用していただきたい。